名補佐役、大いに語る！

編集局インタビュー　⑧

ー“シンビアンＯＳと言えば、管理工学研究所”と言われたいー

村林　弘之（むらばやし　ひろゆき）

株式会社 管理工学研究所　モバイル事業部ユビキタス・ソリューション企画部長

業務内容

自社開発によるビジネスアプリケーション、業務内容に合わせたシステム開発、先端技術の研究開発。
管理工学研究所は長年培ってきた技術とノウハウをもとに、様々な分野の多くの客様にソフトウェアを提供してきました。(HP より)

村林さんのプロフィール

出身地：岐阜県大垣市　　年齢：43 歳　　家族構成：妻、長男（高校 1 年）

多くの金融・証券・保険業界の本支店などが並ぶビジネス街、金沢市百万石通りの中心に（株）管理工学研究所（東京火災海上保険ビル 7 階）を訪ね、約 1 時間のインタビューをさせて頂きました。(以下要約)

編集局　お仕事の内容を教えてください。
村　林　モバイル事業部で、携帯電話・携帯端末向けソフトウェアの受託開発を行っています。また自社企画の製品づくりを重視しています。現在のチームメンバーが 10 人、私の役割としては営業色が強いですね。元々はソフト屋でアセンブラから始めました。名古屋のトヨタ系の開発をしていたので工業用が専門でした。
現在の部署では携帯キャリア向けソフト開発が多く、東京が活動拠点になります。本社が東京の神田、開発主体の分室が目黒にもあるので、どうしても東京と行ったり来たりになりますね。モバイルに関する開発は 12～13 年ほど前から始まりました。
現在、携帯電話向けのシンビアン OS を手掛けていますが、その OS を採用している携帯に関しては、多くのお客様から当社の技術力を高く評価して頂いています。

編集局　石川県でのお仕事はいかがですか？
村　林　ドコモ北陸支社様などとの接点がありますが、法人向けのソリューションが多いですね。石川県の IT 部門では古株になりますので、地場のお付き合いも大切にしたいと思っています。

編集局　ご趣味は何ですか？
村　林　趣味はサッカーです。現在もプレーヤーとしてシニアというカテゴリで頑張っています。加賀シニアというチームにいて、加賀市サッカー協会の理事をしています。
シニアの全国大会というのもあり、結構大がかりな組織です。

編集局　ポジションはどこですか？
村　林　昨年じん帯を伸ばして、左のサイドバックにポジションを変更しました。プレー中は年齢を忘れてしまうので、妻には呆れられていますよ（笑）

編集局　岐阜県のご出身ですが、金沢へはどのようなご縁で来られたのですか？
村　林　妻が加賀市の出身です。妻の両親の老後のことがあって、今は加賀市から通っています。いわゆるＪターンです。岐阜県から名古屋、そして石川県という訳です。

編集局　お休みは何をされていますか？
村　林　自宅には、休日でも仕事ができる環境を作っています。息抜きにプログラムを書くこともあります。趣味が仕事になってしまったようなところがありますから、管理職になっても技術屋のムシが騒ぐといったところですね（笑）
技術に関しては、新しいもの好きという所もあります。iPhone や Android の開発環境などは、興味があって使ってみたくなります。幅広く、興味のあることは何でも知識として持っておきたいと思っています。それがお客様へのサービスにも繋がりますからね。

編集局　部下の方とのコミュニケーションはどのように取られていますか？
村　林　「良くしゃべる」というのが基本です。仕事中でもくだらない話もしますね。
集中する時は集中して仕事をすればいいと思っていますからね。楽しい時間というのも生産効率を上げる上では必要だと考えています。

編集局　今後のビジョンをお聞かせ下さい。
村　林　「携帯電話のシンビアン OS と言えば「管理工学研究所」と言われるようになりたいですね。しかしながら、秘密保持という囲いの中で仕事をしているので、一般の人との接点が余りないのが現状です。自社の優位点を広くアピールして自社ブランドを多くの方に知って頂きたいと思っています。その先駆けが「+J For S60」というソフトです。NOKIA 製携帯電話に「+J」をインストールすると現地語を使いながら、日本語表示・入力が可能になります。このソフトが好評でインターネット上で「+J」のお祭りが始まってちょっとしたブームになりました。
管理工学と言えば「松」や「桐」と言ったイメージがある当社ですが、次の時代に「〇〇と言えば管理工学」という新しいイメージを残したいと思っています。

編集局　最後に ISA へ一言お願いします。
村　林　ISA とは設立当時から深い関係がありますが、最近は ISA の情報が余り伝わってきません。10 年前にセミナーを受けたことがありました。その時は、セミナー後に交流会がありました。
現在もそういう機会があるのでしょうが、そういうものが見えにくいように思います。
参加企業の中には、興味深い取り組みをしている企業も沢山あるようです。しかし、具体的に何をやっているのかは殆ど知らないというのが現状です。
セミナーにしても飲み会にしても、接点を持てる時間がある交流会を行ってほしいですね。
それと「次のシステム工業会はこうしていきましょう」という場が必要ではないかと思います。
趣味などでつなげるのも一つの方法です。個人的には、サッカー選手の講演などがあると嬉しいですね（笑）
それから、お話があるまで、このサイトも知らなかったということが一番の問題ではないかと思います。ID を持っている人間＝インタビューを受ける人間ではないということです。
せっかくの記事ですから、社内にも回覧できるようにしてほしいですね。

＜編集局ブログ＞
実年齢より少し若く見えました。
好奇心旺盛な IT 大好きスポーツ爽やか青年と言った感じを残す管理職です。
モバイル事業部ということで、先進技術の情報収集は積極的に行っているご様子。
管理工学研究所は、慶応大学がスタートということで、国内でも古株のソフト屋さんですが、「松」や「桐」の時代から、モバイル事業への参入で大きく事業の幅が広がったという印象です。
基本的には、一生涯技術屋でいたいという人の多い、技術屋集団というスタンスは色濃く残っているようです。
日本のモバイルの将来をどう見極めるのか、これからの手腕が期待されるところです。